連載作品『パンダヒーロー』

【作品全体の粗筋】

・『パンダヒーロー1　プロパガンダ』

一九二七年、アメリカ合衆国イリノイ州にネオンライトタウンという小さな街があった。その街は非常に治安が悪く、また貧富の差もひどい。更にネオンライトタウンは、スラムであるブラフマー街、中間層の暮らすヴィシュヌ街、最も豊かなシヴァ街と三つの区分に分けられていた。そのネオンライトタウンで最も権力があり悪名高いとされるのがヴァルナ社、そしてその社長であるロバート・クロスだった。彼は売春や麻薬売買などの汚職で巨額の富を築き、さらに邪魔者は腹心のイーサン・カーターなどの暗殺者を使って簡単に排除する、美しく強欲な商人として恐れられていた。そんな中、彼にジョン・ヘイスティングスというライバルが現れる。ロバートはヘイスティングスを葬り対抗勢力を削ぐため、新たな暗殺者を使ったプロパガンダを計画する。そして、パンダの着ぐるみを纏った謎多き暗殺者として名を馳せていたパンダヒーローという人物を雇う。ロバートはパンダヒーローに暗殺を命じると、ミミという彼が長年養女として育てていた少女を前金として渡す。十分な愛情を貰えず、さらには金銭として利用されたことにミミは深く傷つくが、彼女はパンダヒーローと過ごす内に次第に彼と惹かれ合うようになる。そして決行当日。パンダヒーローは見事ヘイスティングスを葬り、ミミに自分の素顔とジョッシュ・ワイルダーという本名を明かすのだった。

・『パンダヒーロー2　カート・ホース』

ミミと過ごす内に、パンダヒーローことジョッシュは雇い主であるロバートの冷酷さに反抗心を抱くようになる。しかし彼はある夜、ロバートとイーサンが元はブラフマー街の出身で、必死の努力の末に今の地位に辿り着いたという過去を聞かされ二人に同情心を抱いてしまう。しかし、同居人であるミミは今でもロバートとイーサンを嫌っており、ジョッシュは三人の間で葛藤する。そんな中、ジョッシュとミミは外出先でボブ・ヴィンスレットというロバートの部下に出会う。三人はすぐに仲良くなるが、ボブはロバートに反抗心を抱く二人を宥め、自分がロバートに昔救われた話をする。ボブの話にジョッシュはますます葛藤を重ねる。一方ロバートは、自身の権力をさらに強固なものにするため、長年彼の腹心として名を馳せてきたイーサンを切り捨て、パンダヒーローを自分の専属暗殺者としようと目論む。パンダヒーローを呼びつけた彼はこの誘いを持ちかけるが、捨てられることを恐れたイーサンは必死に食い下がる。しかしロバートはパンダヒーローの目の前でイーサンに暴力を振るい無理矢理突き放す。その様子を目の当たりにしたジョッシュはショックを受け、完全にロバートに失望してしまう。一方イーサンはロバートに捨てられ精神的に追い詰められるが、そこをボブに救われる。同居の話を持ち掛けられ、イーサンはボブと共に新生活に踏み出すことを決める。

一方ミミは、打ちのめされるジョッシュを見て益々ロバートに怒りを覚える。そんな矢先、彼女は偶然かつての自分の家庭教師、リーズ・ドーキンスと再会する。リーズは昔ロバートの元で暮らしていた頃、唯一ミミに優しくしてくれた女性だった。ミミはリーズとの再会を喜び、すぐにジョッシュことパンダヒーローを紹介する。ところがリーズは彼を見ると、途端に目の色を変える。そしてどういう訳か「ロバート・クロスを殺してほしい」と一言依頼するのだった。

・『パンダヒーロー3　スパルタクス』

リーズは自分の依頼のわけを語り始める。かつて良家の令嬢でありながらも慈善活動に精を出していたリーズは、一七歳の時にロレンス・エベレットという製薬会社の社長と婚約する。ロレンスと結婚し、貧しい人の為に尽力する生活を夢見るリーズだったが、そんな中第一次世界大戦が勃発し、同時期に若きロバートがヴァルナ社の社長として就任する。大戦を利用し毒ガスの売買で儲けようと目論んだロバートは、毒ガスづくりのために自身の美貌でロレンスを誘惑し、自分のビジネスに利用する。毒ガスづくりに嵌まり込んだロレンスは、次第にリーズの実家の財産まで使い潰し、やがて精神的に追い詰められ自殺する。婚約者も財産もロバートに奪われたリーズは彼に復讐する機会を窺い、家庭教師として彼に接近していたのだった。リーズは最後に、「ただ復讐するだけでなく、あなた自身が強く優しいリーダーにならなければならない」とパンダヒーローに言い残す。ジョッシュはロバートを葬り、自分が彼の代わりにネオンライトタウンのトップになるという究極の決断を迫られ思い悩む。そんなある日、ミミは外出先でロバートの三人の部下に無理矢理連れ戻

されそうになる。必死に抵抗する彼女の元へジョッシュが現れ、何とか三人を打倒しミミを救出する。ミミを傷つけられたジョッシュは本格的にロバートに憎しみを抱く。そしてとうとうロバートを打倒することを民衆の前で宣言する。ロバートへの反発が高まっていたネオンライトタウンの民衆達はパンダヒーローを歓迎し、全員がロバートに対抗することを決意する。リーズ、そしてイーサンに父を殺されたヘンリー・シャローブという少年を始めとする民衆達は、パンダヒーローの元団結し、ロバート打倒の日を心待ちにする。そしてミミもジョッシュと共に戦う覚悟を決める。

一方、この出来事を目撃していたボブは、激昂する民衆から何とか三人のロバートの部下を救出し、驚きの事実を彼らから聞くことになる。何と「ミミを襲い、パンダヒーローをおびき寄せ、そして必ず負けろ」とロバート自身が命令していたのだ。何故自分の不利になることを大勢の前でやるよう命じたのか、ボブはいぶかしく思う。

一方ロバートは怪しい行動を繰り返していた。自分の愛人達に別れを告げ、麻薬の売買も酒の密売にも手を切ってしまう。さらにはシカゴマフィアのボス、アル・カポネからの商売の誘いも断ってしまう。最後にロバートはある人物を自分の書斎に呼ぶ。そしてその人物を前に、彼は静かに一人語りを始めるのだった。

ご入学おめでとうございます、新入生のみなさん！こちらのシリーズは三文文士会ホームページで読めます！ 是非チェックしてみてください！

ブルーアイズヒーロー1　マリス・ステラ

こだま

ああ、よく来てくれた。さあ、座って寛いでくれ。そして静かに、私の話を聞いておくれ。

そんなにしゃちこばらないで、ほらゆったりして。何か飲むかい？ きっと長い長い話になる。好きにワインを注いでくれて構わないから。ああ、それでいい。

それじゃ、そろそろ始めよう。これから話すのは私のこと。私の人生、私の母親、私の恋人、私の友人、それから私の家族のこと。一足進むごとに流れ去って行った私の青春、無邪気な子供時代、ふざけ合った少年の時代、傷ついて泣いた青年の時代、そして人生で一回きりだった恋のロマンス。どうか静かに聞いてほしい。いくら私に腹を立てても、私の嘘を見抜いても、どうか口を挟まず、怒鳴り声を上げず、ただ黙って聞いていて欲しい。今夜だけでも、私と友達になって欲しい。

ねえ、君。君は世間の人々が私を何と呼んでいるか知っているはずだね。「悪徳者の豪商」「不埒な雄猫」「業突く張り」「人でなし」。その通りだ。私は世間から色々言われているようだが、どれ一つとして否定するつもりはない。どれもこれも全部正しい。全部私だ。だがこれだけが私ではない。私はまだたくさん抱え込んでいる。誰にも打ち明けることなく仕舞い込んだままのものをたくさん。今夜は君に知って欲しい。私の嘘も真実も秘密も。何もかも今夜打ち明ける。太陽が許すまで。私の嘘塗れの舌が許すまで。

私が生まれ、そして「ロバート・クロス」という名前を授かったのは、一八九五年の五月の事だった。産声を上げた場所は、そう社交界の連中が物笑いの種としているように、ブラフマー街の汚い娼婦宿の一室だった。

幼い私が暮らしていた部屋は、三階にある屋根の傾いた壁の薄い部屋で、ヒビだらけの窓とギシギシなるベッド、そしてその上の母ちゃんの他には何もない、殺風景な所だった。夏は蒸し暑く、冬は凍てつくように寒くと最悪な部屋だったが、小さな私はそんなことは気にも留めずそこでの暮らしを楽しんでいた。窓からは、明け方大変美しい太陽の訪れを眺めることが出来たし、差し込む光線の中にちらちら舞っている埃が粉雪のようで綺麗だった。上に乗って飛び跳ねると間抜けな音を出すベッドもお気に入りだったし、部屋に住み着いていたネズミとも友達だった。

なるほど、幸せというものはよく探せばどこにでも必ずあるものだ。傍目から見れば不幸と言われる人生の中にだって。

だけど、あの時の私の一番の幸せは、やはり母ちゃんがずっと一緒に居てくれたことだろう。

私の母は……まあ、もちろん娼婦だった。だが、私は母が口紅を付けたり、香水を振ったりしている所を見たことがなかった。そればかりか、夜に部屋を出て男を呼び込んだり、客の男を連れ込むこともなかった。

母は病気だった。それももう末期の瘡毒で客も取れず、ろくろく娼婦の仕事ができなかったのだ。だが、母は働きもしないで寝てばかりいるのは気が咎めると言い、娼館中の同僚や近所の娼館から洗濯や仕立物などの仕事をもらい、あの部屋一つと少しのお金を賃金としていた。

他の娼婦達の部屋は母の物と同じように粗末で、何も母だけが不遇な扱いを受けているという訳ではなかった。寧ろ母はその逆だった。碌に体も売れず、食べる物もなく、汚れ物を洗うだけの残り少ない人生しか残されていないに関わらず、母はこの娼館一幸せな人だと皆から言われていた。その理由が私だった。

「あんたの唯一の贅沢だものね、コーラ」

娼婦の一人が、ある日私の髪を撫でながら母に言っていた。

「客との間にできた子は堕ろすのが当たり前。あたし達みんなそうしてきた。だけどあんたは違ったわよね。いくら説得しても脅しても、あんたは最後までこの子を手放さなかった。粘って粘って、結局弱い体ふり絞って赤ちゃんを産んだ。あたし達、みんなあんたを羨んだものだよ。この腕に暖かい赤ちゃんを抱ける喜び。ここでそれを味わえるのはあんただけだったものね」

私はよく母の手伝いをして館内中をぱたぱた走り回った。ところが、母は夜が来ると私を決して部屋の外に出そうとはしなかった。言わば、その時間だけは自由を奪われていたわけだが、私にとってはどうでもいい事だった。母がどこにも行かず、ずっと私と居てくれることがただ嬉しかった。半分こしたパンの大きいほうを私にやり、母はこの上なく幸福な笑顔を浮かべて眠った。ベッドが一つだけなのも都合が良かった。母の胸にぴったりくっついて眠れるから。

母の顔には疱瘡がびっしりと付いていて、そのうちのいくつかは膿んで月明かりにてらてらと光っていた。思おこせば、私の母は決して美しい人ではなかったのだろう。しかし、幼い私は美醜の区別など出来ようはずもなかった。今だってそうだ。だけどそんなことどうでもいいことだった。美しくとも醜くとも、疱瘡があってもなくても母ちゃんは母ちゃんだ。顔のできものなんかどうでもいいと思うくらい、私は母ちゃんが大好きだった。

薄いシーツの中で、母は私を掻き抱いて耳元で何度も名前を呼んだ。

「いい子、いい子ね、ロバート。あたしのかわいい子。どうか自分の名前を忘れないでね。あたしの生きた証がそこに残るように」

私はその言葉の意味を痛いほど知った。父親も分からぬ、貧しい生まれの私にどうしてこんな貴族の令息のような立派な名前をつけたのか、その答えも知っていた。

母の震えるような声と、つんと鼻を突き抜けるかのような鋭い匂いが、幼い私を時々たまらなく悲しくさせた。母の死期が近いことは、教えてもらわなくとも分かっていた。

母ちゃんはもうすぐ死ぬ、もうすぐ死ぬ。

そう何度も自分に言い聞かせた。いざという時に、泣かずに済むように。

そして何度目かの朝、母はついに動かなくなった。ある朝目覚めると、いつもは暖かい母の肌がひんやりと冷え切っていた。「母ちゃん、起きて起きて」と何度か言ってみたが、徒労に終わった。

娼妓達や遣り手の老婆が一同部屋に集まって遺体を運んだ。私は窓から母ちゃんが庭の楡の木の下に埋められるのを眺めた。この貧しい娼館では、教会に墓を作る金も用意できなかったのだ。なけなしの金で牧師を一人呼び、祈りを捧げるだけの簡単な葬式で精一杯だった。

埋葬が済むと、一同は私の処理について額を合わせて話し合った。

「置いてやったっていいじゃないか。あんな小さな子、放り出したらかわいそうだよ」

大抵の女はこう言っていた。しかし、遣り手の老婆一人は反対だった。

「じゃあ聞くけどね。この子が大きくなるまで一体どのくらいの食べ物と金が必要だい？」

そう彼女が辛そうに言うと、娼妓達は気まずそうに黙った。

「今まではよかったさ。コーラは外からもらって来る仕立物やら洗濯物の仕事で金を貰って、それでこの子を育ててたんだから。でももう養育費を稼いでくれるコーラは死んじまったんだ。そうなったらこの子を育てる金はどうやって工面するんだい？　紅一つ買うのにもかつかつなうちで、この子を立派に育てられるかい？　それに育ててやったとしても、これから先この子は役に立つんかい？　この子は女でもなければ用心棒になれるほど丈夫でもない。それでもお前たち、自分の食い扶持削ってまでこの子を育てるかい？」

最早女達は何も言わなかった。次に遣り手は私の目の前にやって来て、涙を流しながら私を抱きしめた。

「ごめんよロバート。でもこうするしかないんだ。お前の母さんはあまりに急に死に過ぎた。せめてもうちょっと遅かったらねえ。でも誰にも文句は言えやしない。ロバート。これからは一人で生きるんだよ。酷い事を言うようだが、あたしらだってこうするしかないんだからね」

あれよあれよと言ううちに、私は戸口に追い立てられた。玄関口で娼妓達が私を抱きしめ、ポケットに少しの食べ物や小銭を入れてくれた。最後に遣り手が顔を覆いながら言った。

「分かってるよ、ロバート。お前だって人に値踏みされるために生まれてきたわけじゃないさ。でもね、あたしらは逆にどうしても人を値踏みしなきゃならないのさ。許しておくれね。ああ、せめてシヴァ街の連中みたいに金があればね……」

扉が固く閉められたので、私もいつまでも陣取るわけにはいかなかった。私は一人歩き出した。なるべく楡の木の方を見ないように。

途中、空腹に見舞われたので、私は大馬鹿にも貰ったものを全部平らげた。満腹は長く続かず、次の空腹が押し寄せた時には自分で自分の腹を満たさなければならなかった。

しばらく私は一縷の希望を灯し、いかにも憐れな顔を作って突っ立っていたが、結局のところ誰も私に憐憫の情など抱かなかった。私に、というより他人全般に。

私はまたとぼとぼと歩き出し、路地から路地へと渡り歩いた。夕暮れで辺り一面物寂しく、危うく泣き出しそうになった。

ふと、鉄製のゴミ箱に汚い成りの子供達が大勢群がっているのが目に入った。私は直感で、あそこに食べる物があるんだと思い、のこのこと近づいていった。彼らは私を横目にチラリと見ると、またゴソゴソとやり銘々の戦利品を持ち去っていった。私は体を精一杯折り曲げて、そこに残っていたキャベツの芯を手に入れた。かじってみたが、美味いか不味いか以前に食べられたことが嬉しかった。私はやがて噛めなくなったそれを、長いことしゃぶり続けた。腹が減ったらゴミ箱を漁る。これが四歳の私に更新された新知識だった。

お金の使い方が分からなかったので、ポケットの小銭で何か買うということはしなかった。このピカピカした丸い板は、あの娼館を、母を思い起こさせる思い出の小物だった。手放すなんて嫌だった。

陽が落ちると私は眠る場所を捜し歩いた。これは食べ物より苦労しなかった。

ブラフマー街の子供達は寒さで凍えないよう、冬場は一塊になって眠るのだ。大勢いればいるほどいい。なので私は、鉄パイプが何本も張ってあるレンガ壁の陰で眠っている集団の中に、すんなりと迎えられた。少し年上の女の子が私を強く抱きしめた。その時になってようやく、私は母ちゃんの死をうっすらと感じた。顔立ちも髪の色も違うが、私は彼女を必死に母に見立て、力いっぱいしがみ付いた。彼女は母のように私の名前を呼んではくれなかった。体温を分けてもくれなかった。

翌朝、私は一人で目を覚ました。他のみんなはいなくなっていた。嫌な予感がしてポケットを探ると、小銭は全てなくなっていた。

私は真っ青になった。むろん金銭が全て消え失せたからではない。母と私を繋ぐものが一気になくなってしまったのが、信じられなかったのだ。

どうしよう！　どうしよう！

と、私は一人恐慌に陥った。すると母の消失に引き出されるようにして次々と、昨日までまるで感じなかった、年に似合わない絶望が頭を芋の蔓のように覆った。もう毎日ご飯が食べれるわけじゃない。ベッドで眠ることも出来ない。誰も守ってくれない。誰も優しくしてくれない。母ちゃんはもういない。僕はもう独りぼっちなんだ。

出来ることは泣き喚くことだけだった。地面に寝転がって、駄々っ子のように暴れまわって泣いた。こうして泣いていても、母ちゃんはもう駆けつけてはくれなかった。それが分かると、次に私は起き上がって走り出した。

母に会いたかった。死体でも構わないから顔を見たかった。ずっと一緒に居たかった。一人きりで生きていくよりも、死んだ方がマシだ、と思った。母の死体を背負ってミシガン湖の暖かい水の中に身を投げて死んでしまおう、そう思った。とても、四歳の子供の考えることじゃなかった。

例の娼館は扉も窓も固く閉じられていた。楡の木の下

まで飛んでいくと、私は素手で地面を掘り返した。ところが掘っても掘っても母は出てこない。ただただ、冷たい木の根が露わになるだけだった。

やがて、腕が疲れ手の皮がむけた。母の髪の毛一本も手に入らないまま、私の手は動かなくなった。長い事、ぼんやりとそこに佇んでいたが、やがて私は人生で一番最初の決断をした。本当なら、この年の子供がするような決断ではなかった。

私は黙って立ち上がり、背を向けて歩き出した。そして二度と、この年になるまでそこを訪れることはなかった。

朝日が歩道に煌めいていた。窓を介すかどうかは問題ではないようだ。どこにだって陽は登る。どこにいたって、寂しくたって、太陽はいつだって私を照らす。

歩いていくと途中、酒屋のゴミ箱に焼かれた鳥の足が捨ててあるのを見つけた。拾い上げて道すがら食べた。まあ、美味かった。

することもなしに道端に座り込んで、小石を使って落書きしながら、私はぼんやりと思った。

撲はもう独りぼっちだ。いくら呼んでも母ちゃんは戻ってこない。一人で生きていくしかないんだ。

その翌日から、私は急激に頭が良くなった。それというのも、そこら中をうろうろする汚い身なりの子供達が私の師となり、生きる術をその行動で示してくれたからだ。

まず、私は人気の少ない路地裏に、ゴミ捨て場から拾ってきた壊れた家具やブロックなどを使って掘っ立て小屋を作った。小屋と言っても、ブロックを積んだだけの壁に布一枚を張り巡らせて屋根代わりにした程度のものだが。それでも、拾ってきたボロボロのソファをベッド代わりにして眠ることも出来たし、ある程度は雨を凌げたのでまあ、いい具合の出来だっただろう。時々、小屋を出て大勢の中に寝に行く日もあったが。

また食べ物の手に入れ方も学んだ。大抵はゴミ箱から入手するが、いいものはとても望めなかったので、どうしてもという時は飲み屋などの廃棄物を強請りに行った。ただしこれは競争率が高いうえに長い間待つ必要があったので、そうそう上手くはいかなかった。

そしてどうしても何も得られなかった時は盗みを働いた。ただしこれは究極の選択としてだ。成功すればいいものに有りつけるが、失敗すればとんでもない目に合う。道路に引きずり出されて、見せしめのように殴られるのだ。この危険性は、私の場合人一倍高かった。ほかの子供達は大抵徒党を組み、見事な連携プレーで盗むのだが、私には協力してくれる仲間などいなかった。まあ、それも仕方ないことだった。当時の私は、字も読めない、体力もない、気味悪くやせ細ったボロボロの四歳の子供。そんな私が盗みの役に立つとは、誰も思わなかった。

つまり、盗みも全部一人でこなさなければならない。失敗する確率も桁違いだった。

或日、鶏を連れた卵売りから一つくすねようと思って近づいて行った

ことがあった。運よく籠から一つ手に取ってさあ、ずらかろう、と言う時に運悪く近くにいた雌鶏が大声で鳴いた。鳴き声を聞いて振り返った卵売りは、しっかりと卵をくすねようともぞもぞしているクソガキを両目に映した。

「何やってんだ、このクソガキ！」

そう怒鳴られ、逃げ出す暇もなく私は卵売りに髪を掴まれ道を引き摺り回された。

「やい、みそーっかす！　みそーっかす！　ほらほらどうした立ってみろ！」

道に立っていた子供達が面白がって、手を叩きながら私を揶揄った。容赦のない彼らの笑い声が、髪を引っ張られて痛む私の耳に鋭く突き刺さった。

最後に卵売りは私の頬を拳で一発殴った。頬骨に重い衝撃が走り、乳歯が抜けて地面に転がり落ちた。子供達が歓声を上げ、卵売りは清々したのか、私に構わず帰っていった。私はしばらく、地面に蹲って血と涎をだらだら流しながら痛みに耐えていた。

ケガをするのは何も盗みに失敗したときだけではなかった。私はよく子供達に虐められた。無知で気弱で力のない私は、彼らの恰好の的だった。せっかく得た食べ物を奪われ、頬を何発も殴られ、その度に歯が抜けた。暴力で抜けた歯の位置には、未だに永久歯が生えていない。だから私は、今でも人前で大口を開けて笑えない。その理由を、人々は私が気取っているからだと思っているらしいが、実はそうではない。歯の生えてこない穴だらけの口の中を見られるのが怖いだけなんだ。

しかし、五歳になった頃にはこんな生活にも慣れ始めていた。乏しくとも生きる術を、私は少しずつ身に着けていった。ゴミ漁りも少しの万引きも、少しは上手くなり、そこそこは何かを口に入れられるようになった。

だが、決してそれで満足できたわけではない。食べられるようになったとはいっても、やっぱり量はものすごく少ないし、それすらも時々他の子供に取り上げられる。おまけに手あたり次第なんでも口に突っ込むおかげで、夜になると私はよく腹を下し、激しい腹痛と下痢と吐き

気に何時間も苦しめられた。あの時の辛さは、まるで大蛇に胃を踊り食いされているかのようだった。それにいくら痛みに大声で泣き叫んでも、心配して駆けつけてくれる人はいなかった。

「まあ、どうしたのロバート。あらあら、お腹が痛いんだね。よしよし、もう大丈夫よ」

昔はそういって、苦しむ私を抱きしめてくれた母ちゃんは、もういなかった。誰にもこの苦しみを知ってもらえなかった。誰からも構ってもらえなかった。それが一層辛くて辛くて、痛いから泣いているのか、寂しいから泣いているのか分からなくなった。

掘っ立て小屋の中でわんわん泣きながら、私のあの時の決断が薄らいでいくのを感じた。

このまま死んでしまいたい。生きていたくなんかない。

そう何度も思った。

このまま死んでしまえば、もう一度母ちゃんに会える。明日どうやってご飯を食べようか悩まずに済む。お腹がすくことだってきっとないはず。神ちゃま。僕もういっぱい頑張りました。だから母ちゃんの所へ連れてってください。母ちゃんに会わせてください。そのためなら、痛いのも辛いのも、今は我慢しますから。

ところが。神様は私の願いを一度だって聞いて下さらなかった。どんなに吐いても、胃がねじれる程苦しんでも、私は必ず生き延びた。夜のうちに私を襲った腹痛も吐き気も、朝が来るとすっかり消えてなくなっている。回復すると、私はまた当たり前のように食べ物を探しに行く。運がいいのか悪いのかさっぱり分からない。

私はそうして生き続けた。冬の雪の降る夜、周りの子供達が凍り付いて死んでいく中、私は生き続けた。ジフテリアにやられた遺体が道に増え続ける中、私は生き続けた。そしてまた、人に殴られ物を奪われ、腹痛に七転八倒するのだった。

そして私は六歳になった。

「冬が明けて木の葉が一番青々と綺麗に色づいたら、お前の誕生日が来たってことだよ」

母ちゃんは昔、私にそう言っていた。母ちゃんが死んでから、冬が明けて一番に緑が輝く季節が二回来ていた。だから文字も数字も読めない私でも、自分が六歳になったと知ることが出来た。

その頃には、私は格段に賢くなっていた。万引きも物乞いも上手になったし、ゴミ漁りにつけても、どういう物なら食べても大丈夫か、一目で見分けられるようにもなった。そのおかげで、腹を下して大泣きすることも珍しくなった。

お金のこともようやく理解した。いくら渡すと、パンがいくつ貰えるか、買い物をする人々を観察し、自力で買い物の仕方を身に着けた。そのおかげで、私はある程度店で食べ物を買うことが出来るようになった。いつ殴られるかビクビクせずにいいものを食べられるのは、中々気分が良かった。それにお金は私の身も守ってくれた。いつも私をこっぴどく虐める子供達にいくらか渡すと、もう彼らは私を殴ろうとはしなかった。私の残りの歯はこうしてお金に守られた。

死と隣り合わせだった生活は、こうして段々と離れて言った。しかし、一人で生きていけるようになっても、何のために生き延びているのかは分からなかった。これから先、何か楽しいことが待ち受けているわけでもない。私が生きていても、誰かが喜んでくれるわけでもない。それなら一体どうしてゴミ箱を漁るのか、道行く人にお金を強請るのか、パンやミルクを店からかすめ盗るのか分からなかった。ただ、あの時は本能のままぼんやりと生きていた。後、どのくらいこんな生活が続くんだろう。眠る前に、掘っ立て小屋の中に座り込んで、よくこんなことをぼんやりと思った。終わりのない道をひたすら鞭打たれて歩いているかのようだった。それでも自ら命を絶ってしまおうとは思わなかった。少しは上手に生きられるようになってしまったから、わざわざ死を選び取ることなど考えなくなっていた。いや、最早何も考えたくなかった。辛いだとか寂しいだとか、そんなことで泣くのにはもう疲れ切っていた。

ところが、そんな生活を決定的に変える出来事がある日突然起こった。私にはいわゆる「運命の出会い」というものが三度あるが、これはその一番最初だった。

或る昼下がり、私は暇にあかせてブラフマー街の売春宿の並ぶ道をぶらぶらと散歩していた。道端では屋根の下で生活できなくなった女達が、地面に敷いた布の上で商売していた。

ふと、ひび割れた地面に中々大ぶりな花がいくつか咲いているのを見つけ、屈んで摘み取った。これを束にして売ったらそこそこ儲かるんじゃないか。そう目論んだのだ。

そして花束を作って立ち上がろうとしたその時だった。ふと耳に中年の女の呻く声が耳に届いた。声の元は近く、ひょいと頭を傾けると、長く黒い巻毛の女が壊れかかった馬車のない荷馬車の陰で屈みこんで何やら唸っているのだ。

私はその様子を見てほくそ笑んだ。きっと深酒した娼婦が二日酔いで苦しんでいるのだろう。何か手を貸して

やれば、お礼に二ドルくらいは貰えるかもしれない。そう思い、私はのこのこと彼女に近づいていった。
彼女の後ろに立つと、私はさも親切そうな猫なで声で
「姉さん、大丈夫？　何か僕、お手伝いしようか？」
と言った。
と、その時私はおかしなことに気づいた。女はやせた両の腕を腹に添えていたのだ。その腹というのが奇妙なことに、ぼっこりと膨らんでいた。おまけに下の服は脱ぎ捨てられ、地面は血と何やら透明な液体で、ぬらぬらと濡れて光っている。その奇妙でグロテスクな出で立ちを見、私は突然怖くなった。ヤバい女に話しかけてしまったかも知れない。そう直感的に思って、小さな足がじりじりと後ずさった。
しかし、女はしっかりと私の猫なで声を聞いていた。いきなり青ざめた顔と黒髪が降り上がると、彼女は泣きそうな声で叫んだ。
「ああ、坊や、本当かい⁉　助けておくれかい⁉」
その、鳥の柄骨のような痩せた体からは想像もできないほどの激しい声に、私はすっかり気圧されてしまった。逃げようとしていた足が止まり、思わず黙って頷いた。
「ああ、よかった！　じゃ、こっちに来てあたしのお腹を押しておくれ！　そうそう、そうよ！」
下部だけ異様に膨らんだ彼女の腹に触れると、何やら固いものが皮膚の下で蠢いているのを感じた。気味悪く感じたが、彼女が今までにないほど猛烈に苦しみだしたので、いよいよ後に引けなくなった。言われるままに腹を押すと、固いものが徐々に回転しながら、彼女の股に向かっているのが分かった。
彼女の呼吸に合わせて腹を押す。それを三十分ほど繰り返したその時だった。
「坊や！」
と、彼女が突然金切り声を出した。
「足の間に手を入れて！　生まれるわ！　しっかり受け取って！」
言われるまま彼女の足の間に手を差し入ると、暖かく丸いものが触れた。見てみると、それは人の頭だった。彼女の叫び声が高くなるにつれ、次に肩や腕、足が現れ始めた。そしてとうとう爪先が彼女の中からひり出されると、突然ズシリとした重さが私の両腕に乗った。
あっ、赤ちゃんだ！
私が腕に抱いているものを認識するや否や、その生まれたての赤ん坊は火が付いたように泣き出した。その泣き声を聞くと、彼女は荒い息をしながらも幸福そうに微笑んだ。そして、ブルブル震える腕で服のポケットから酒の小瓶と鋏を取り出し私に渡した。私はすぐに鋏に酒を振りかけ、赤ん坊の臍に付いている長い紐を切った。アルコールに消毒作用があることも、臍の緒を切らなければならないことも、あの時の私は全く知らなかった。なのに、私は自分のすべきことを、何故か完璧に理解していた。
震える腕が私と赤ん坊に伸びた。右腕が私の肩に、左手が赤ん坊の頬に触れた。
「まあ、なんてかわいい。元気な男の子だわ」
荒い呼吸の狭間に、彼女は弾むように言った。そして次に、青ざめて汗だくになった顔を私に向けた。
「いいかい、坊や。この子の名字はカーターだよ。この子のお父さんはね、あたしが妊娠してるときに死んじまったけれど、荷馬車屋のカーターって言ったんだ。いいかい。だからこの子の下の名前はカーター。だけど、上の名前は坊やが付けておくれ。立派な名前を」
ぴしゃりという水音がし、思わず下を見てみると、地面は彼女の体から流れた大量の血液で赤く染まっていた。その赤い地面とは対照的に、彼女の顔は青白く震えていた。やがて彼女は最後の力を振り絞り、私の頬にそっと触れた。
「ありがとうね、坊や。この子をよろしくね」
そして安心しきったように、地面にバタリと倒れた。長く黒い巻毛が、徐々に赤く染まっていった。私は驚いて彼女の口元に手を持っていったが、もう息はなかった。
大泣きする赤ん坊と私だけがあとに残された。赤ん坊は耳をつんざくような声で泣き喚き続けた。私はまるで夢の中にいるかのようなぼんやりとした意識から、赤ん坊の泣き声で一気に現実へ引き戻された。すると途端に恐怖が押し寄せ、狼狽して地面に横たわっている母親の体を何度も揺すった。もちろん徒労だった。しかし、私が怯え狂乱しているさなかでも、赤ん坊の声はどんどん大きくなる。
私はとうとう覚悟を決めた。自分を案ずるのを止め、横たわる彼女のシャツを脱がせると、露わになった乳房に赤ん坊の口を持っていった。彼は勢いよく乳を吸った。母親は相変わらず、幸福そうな笑みを浮かべて死んでいた。赤ん坊は、彼女の残した最後の愛をその小さな口から得た。
「イーサン」
ふと、私はぽつりと口に出した。
「イーサン」
もう一度呟くと、強張っていた唇が徐々に持ち上がっていくのを感じた。
「イーサン！　イーサン！　そうだ、お前の名前はイーサン・カーター！」

私は飛び上がってそう叫んだ。イーサン・カーターはもう泣くのを止め、母親の腹の上で丸くなりながら私をつぶらな瞳で見つめた。私はイーサンを抱き上げると、母親が来ていたシャツでその体を包んでやった。なんだか、さっきより重たい気がした。

イーサンは私の肩に柔らかい頬を乗せると、すぐにすやすやと眠ってしまった。私は彼の母親の方を向くと、先ほど摘んだ花束を取り出し、彼女の胸の上に置いた。そしてそのうちの一輪を、イーサンの手に握らせた。

イーサンからは、穢れのないミルクの匂いだけがした。その匂いが、私の全身に優しく流れ込んできた。優しく揺すり上げながら歩き出すと、彼は気持ちよさそうに寝息を立てた。私は必死に彼の頬に自分の頬を擦りつけ、その暖かい体温を味わった。母ちゃんが死んでから、もうずっと誰からももらえなかった暖かさだった。

ははっと、私は愉快に笑った。そして次に、母ちゃんのことを思い出した。楽しかった娼館での日々、寒空の下での一人寝、生ゴミの味、口に溜まった血の味、冷え切った指の感触。そんな過去の思い出が、身の内を勢いよく流れ、私の心を激しく焼いた。

私は勢いよく頭を上げた。照り付ける傾いた太陽、そして遥か彼方に光り輝くヴァルナ社のビルが見えた。

「どうだ見てみろ！　俺の赤ちゃんだぞ！」

イーサンを強く抱きしめ、遥か彼方を見上げ、私は一人大声で叫んだ。

「ほら！　この子がイーサンだ！　イーサン・カーターだ！　俺が名前を付けたんだ！　俺の赤ちゃんだ！　俺の家族だ！」

私はイーサンを抱きしめたまま、くるくると道の上を回った。

「そうだ！　俺はもう独りぼっちじゃないんだぞ！　もう泣いたりなんかしないんだ！　寂しくなんかないんだ！　ざまあみやがれ！　俺は生きてやるぞ！　この子と生き抜いてやるぞ！」

私は大笑いしながらイーサンに夢中で頬ずりし、接吻を浴びせた。イーサンは煩わしそうに身動ぎした。

涙が一筋、頬を流れていった。辛さや寂しさからくる涙ではなかった。あの時初めて嬉しくて泣いた。初めて、過去ではなく未来を見た。初めて、生きていくための希望を見つけた。

イーサン。俺のイーサン。俺の家族。俺の初めての子供。あの子はこうして生まれた。こうして俺の所にやってきた。あの子が生まれた日を、俺は今でもいつだって思い出す。あの頬の柔らかさ。あの元気な泣き声。祝福するように太陽の光を浴びて煌めいていた、あのヴァルナの塔。

続く